

[日付]

八方美人主義が 大学生の恋愛行動 に与える影響

[文書のサブタイトル]

要約

私たちは大学生の恋愛行動、特に恋愛における束縛行動の、各人の相違を生み出すものとして、他人からの評価を気にする世界観を挙げた。具体的には「自分が人にどう思われているか気になる世界観を持つ人ほど、束縛行動を行う」という研究仮説の元、大学生を対象にアンケートを実施し、164名の有効回答を得た。この集計データを回帰分析したところ、研究仮説と整合的に有意な結果が得られた。前述の結果が得られたことから、近年進みつつある行動経済学の研究結果やその考察と合わせ、企業と企業または企業と人によるマーケティングの分野に対して、八方美人主義のような人からの見た目を気にする消費者の心理や、そういった心理による消費行動への影響に関して、今回の私たちの研究が貢献できることを願っている。

キーワード:大学生、恋愛、束縛行動、世界観

はじめに

経済学とは、限られた資源をどのように分配するかを決定することによって、人々がどのように幸せになれるかを考える学問である。しかし、一概に幸せといってもその定義やそれを実感するための要因は1人1人異なるものである。そこで、経済学では理論を考えるために、必ず「合理的」な行動をする経済人をモデルとして研究を進める。つまり、人は必ず自分自身の利益を最大化するために行動するという前提で考えられるのだ。しかし、人は必ずしも合理的な行動をとるとは限らない。もしそうであるなら世界中で誰もボランティア活動や募金活動をしなくなってしまう。そこで近年、行動経済学という学問がこれからの経済学の主流になりえるものとして、世界中で注目を浴び始めている。

米国プリンストン大学のダニエル・カーネマン教授と故エイモス・トヴァスキーが行った心理学の研究が、2002年にノーベル経済学賞を受賞したことをきっかけとし、今年2017年のノーベル経済学賞に経済学には、心理学を応用した意思決定の分析を行う行動経済学に貢献した米シカゴ大のリチャード・セイラー教授(72)が選出された。行動経済学とは今までの伝統的経済学のような合理的な行動をする経済人の仮定を置かない、人の心理などを考慮して経済について考える学問である。この行動経済学の、学問としての目まぐるしい発展によって、今まで用いられてきた伝統的経済学では説明することのできなかつた、人の経済行動についての疑問が解明されつつある。

私たちはこの行動経済学について研究し、本論文の作成に取り組んだ。本稿は行動経済学の最も一般的な研究方法であるアンケートなどの実証分析や、人々の行動に影響を与えうる各々の価値観を、世界観という言葉を用いて因子分析としていることが大きな特徴である。私たちの論文がさらなる行動経済学の発展、さらには人の幸せに繋がることを願っている。

目次

要約
はじめに

目次

本論文の構成

1. 序文
 - 1-1 大学生の恋愛事情の現状
 - 1-2 束縛行動について
 - 1-3 束縛行動を生じさせると考えられる心理
 - 1-4 束縛による今後の問題
2. 用語定義
 - 2-1 世界観について
 - 2-2 八方美人主義について
3. 研究仮説
4. 実証分析
 - 4-1 研究指針
 - 4-2 研究方法
 - 4-3 分析結果
5. 考察
 - 5-1 単回帰分析について
 - 5-2 重回帰分析について
6. 結論
 - 6-1 「八方美人主義」と「束縛行動」の関係
 - 6-2 世界観というものの有用性
7. 将来の研究課題
 - 7-1 研究、調査対象の細分化及び分類の必要性
 - 7-2 「八方美人主義」と「束縛行動」のさらなる分析の必要性
 - 7-3 今後の実用性について
8. おわりに

付録1 アンケート表

付録2 重回帰分析結果

本論文の構成について

本稿の最終的な目標は、序論の中でも述べたように、大学生の恋愛行動における束縛行動に対して、行動経済学で一つの規範として定義がなされている世界観（＝自己効力感）を、伝統的経済学と加味して考察することで、今まで行動経済学では研究が進んでいなかった、経済学における束縛行動についての理解と考察を深めることである。そういった理解や考察から、私たちにとって関わりの深い恋愛において、その中でも特に話題性の高い束縛行動についての頻度や程度の違いを分析し考察することで、我々特に大学生の生活をより幸せに溢れ、充実したものにすることが私たちの望むことである。このことを常に念頭に置いた上で、私たちは以下の過程を踏んで論文を執筆する。

最初に、第一章にて、本稿のテーマである大学生の恋愛行動における束縛行動について、先行研究を中心にその現状を分析する。これにより、誰の目にも明らかな、現代における大学生の恋愛事情の現状に対する理解を深めることを図っている。また、恋愛の中でも、さらに深部までフォーカスした束縛行動について、その原因や時代的な背景について見識を深めたうえで考察していくことで、束縛行動の動機や原理についての考えを深めていきたい。

次に、第二章では、本稿に使用されている用語についての定義を示している。特に人々の行動に影響を及ぼしている各々の価値観や倫理観は無数に存在している。よって、研究において仮説を打ち立てたそのような心理にぴったりと当てはまるような言葉が存在しないこともしばしば見受けられる。そういったものの意味を示すために、ほぼ意味が一致する言葉を組み合わせ、各研究でオリジナルの言葉を定義することもある。そのような言葉についての定義と意味を明確化させ、以降の論文において言葉の意味に躓くことなく、よりスムーズに読み進めてもらうために本章を作った。これらを踏まえ、私たちの研究仮説を第三章で名義している。

次に、第四章では、実証分析を試みてゆく。この第四章の実証分析を経ての回帰分析に基づく考察は、はじめに、アンケートを大学生に対して拡散、収集し、これらの得られたデータを回帰分析することで、第三章の理論分析の仮説を確認する。まず、アンケートの収集方法について示した後、アンケートにおける各質問内容とその細かな意味について説明する。その後、アンケート結果を単回帰分析、重回帰分析した結果を明示している。

最後に、第三章で私たちが考えた仮説に対して、単回帰分析、重回帰分析の結果をすべて読み取り、考察した。その考察をまとめたものが第五章である。この考察については回帰分析の結果が有意であったものはもちろん、有意でなかった結果に対しても、興味深い結果や仮説とは全く異なる結果などについて、その原因や要因を考えることで、大学生の恋愛行動における束縛行動と、それに影響を与える世界観についての理解を深めることを目的としている。

しかし、前述でも述べた通り、私たちの最終的な目標は大学生の生活をより幸せに溢れ、充実したものにすることと、さらなる行動経済学の発展に少しでも寄与することである。また、近年進みつつある行動経済学の研究結果やその考察と合わせ、企業と企業または企業と人によるマーケティングの分野に対して、八方美人主義のような人からの見た目を気にする消費者の心理や、そういった心理による消費行動への影響に関して、今回の私たちの研究が貢献できることを願っている。このことを念頭に本

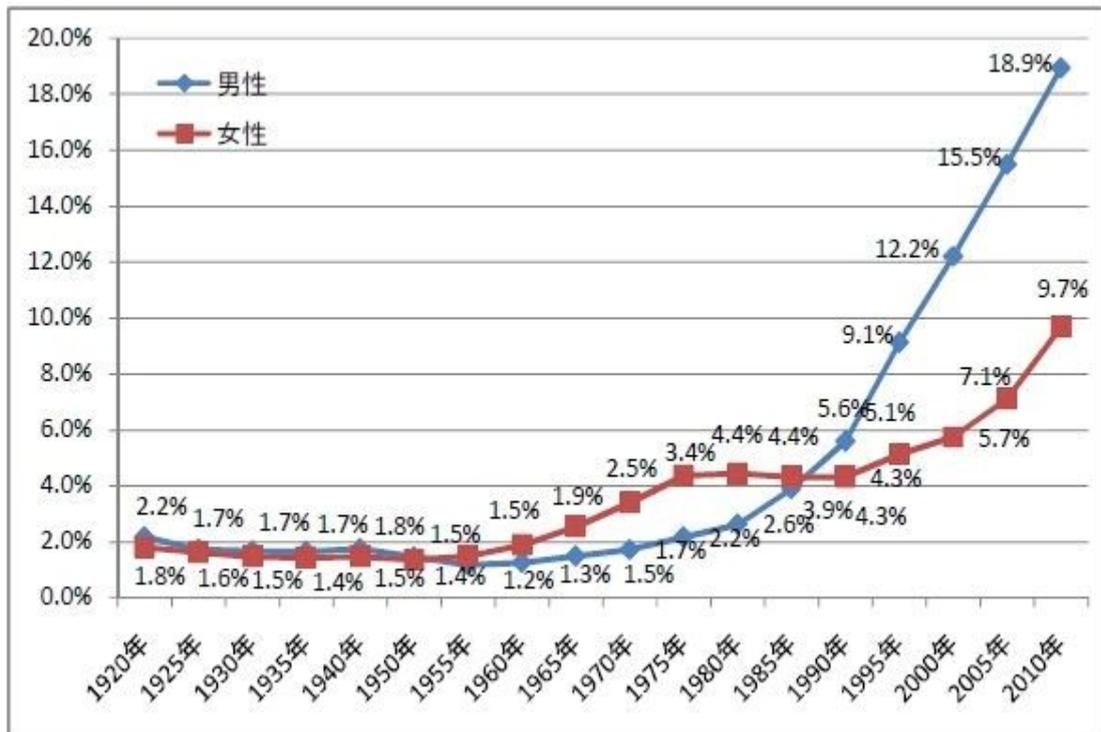
章の締めとする。

1-1 大学生の恋愛事情の現状

昨今、多くの大学生の話題の中心となっているのは恋愛に関する話である。これは、大学生という時代が中学生や高校生にありがちな資金的な不足や、社会人にありがちな仕事による時間的な不足といった、恋愛行動を妨げうる2つの要因の影響が比較的少ないからであると考えられる。そもそも、人は青年期になると異性に対する関心や憧れが高まり、異性との恋愛関係を望むようになる。恋愛映画やドラマ、小説で描かれるような、2人でデートをしたり、手を繋いで歩いたりといったシチュエーションをほとんどの人が望んでいるのだ。

しかし、その形態や流行は時代によって変化している。特に近年では、「草食系男子」という言葉が現代の恋愛における1つのトレンドとなっている。現代の大学生たちは恋愛行動に対して、面倒くさい、恋人がいなくても友達やSNSで寂しさは紛れる、異性との関係が悪化することを恐れて積極的にアピールできない、といった理由で恋愛行動を避ける傾向にあるのだ。決して異性との恋愛関係に対する関心や憧れが薄れているわけではないが、現代の大学生はより手軽に、深い愛情を求める意識が強いといえる。これは、近年見られる恋愛に関するサービスにも表れている。例えば、お金を支払うだけで異性とのデートが手軽に経験できるレンタル彼氏・彼女というサービスが、その発想の斬新さから昨年話題になった。また、自分の顔や簡単なプロフィールを登録し、気になる異性に対してアプローチをし、お互いが興味を持っていたらメッセージのやり取りが行えるTinderというアプリケーションが大学生の間で大流行した。これは今までの所謂出会い系サイトとは異なり、スマホ上の左右のスイープのみで操作が行えるという、より手軽に異性との出会いが望めるものである。このように現代における流行りの恋愛形態を見ても、現代の大学生は恋愛に対して手軽さや気軽さを重視し、それが実際の恋愛行動への消極性に繋がっているのだ。

この消極性は日本における最大の社会問題である少子化の、主な原因の1つとなっている。大学生時代における恋愛への消極性が、世の中の恋愛に対する全体的な消極性となり、社会人になった際の結婚に対する関心の低さに繋がっていると考えられる。現に男女の生涯未婚率は年々上がり続け、今では男性の5人に1人、女性の10人に1人が1度も結婚を経験することなく一生を過ごしているのだ。（図1 総務省「平成22年国勢調査速報」）この数値は今後も上がり続けるだろう。このように、今後の日本の未来を背負う大学生の恋愛への消極性が、未来の大きな社会問題へと繋がる可能性を秘めている。少子化といった事態を未然に防ぐためにも、現代の若者に恋愛の素晴らしさを理解してもらう必要がある。



【図1】生涯未婚率の推移
 出典：総務省「平成22年国勢調査速報」

1-2 恋愛における束縛行動について

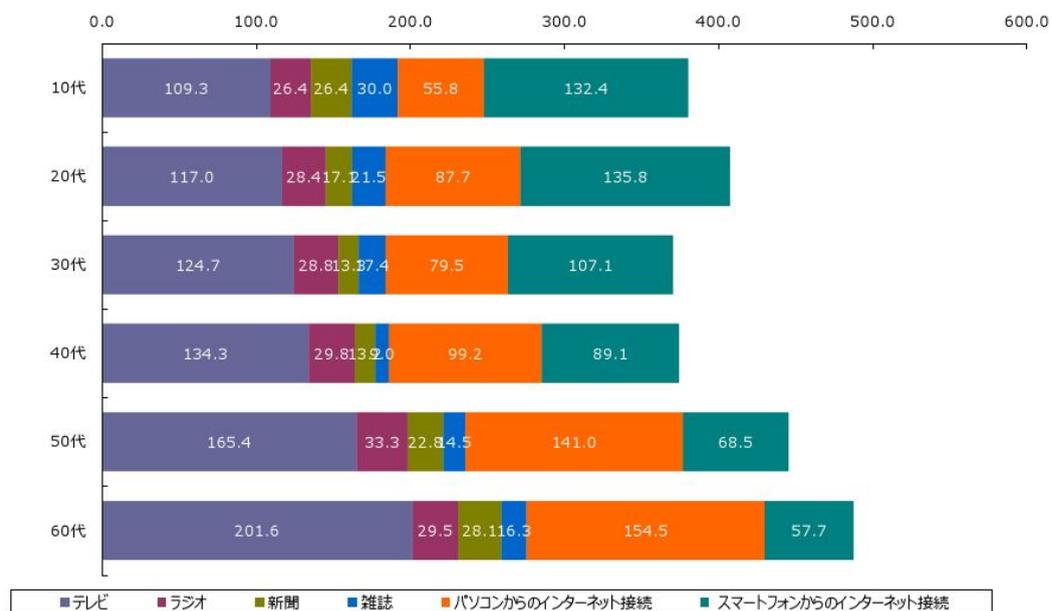
上記の大学生の恋愛の消極化に加え、スマートフォンの爆発的普及によって、いわゆるスマホ依存症というワードが近年世の中を駆け巡っている。現在では若者を中心に約4割の日本人が1日に2時間以上スマートフォンに触れ（図2 MRC 2016年11月次定点調査）、生活の中に無くてはならない物の1部となっている。しかし、それに伴った勉強時間の減少や記憶力や情報の処理能力の衰えからくる記憶力や集中力の低下、眼精疲労やドライアイによる、睡眠時間の減少による健康への被害が社会問題となっている。（情報サイト話題の焦点）しかし、裏を返せばそれはスマートフォン技術の発展であり、それだけスマートフォン1つで生活を賄えるほど何でもできるようになったということである。

主要メディアの年代別平均接触時間

※プライベートで「スマートフォン」を利用の回答者 (n=816)

MRC Marketing Research Camp

【全体】



©2016 JustSystems Corporation

52

【図2】 スマートフォンの接触時間

出典：JMRA（日本マーケティング・リサーチ協会）2016年11月次定点調査

特に、コミュニケーション手段に関してここ数十年で大きな変化が見られる。スマートフォンを活用することによって、コミュニケーションがよりスピーディーで多角的なものになったことによって、その面白味や熱中度は今までとは比べ物にならないほど飛躍している。例えば、一昔前であれば手紙やメールがその主流であったのに対し、現在ではLINEを代表とするSNSアプリケーションによって、より手軽に、大

量の情報を発信することが可能となった。

それによって恋愛の形態も大きな変化を見せている。コミュニケーションの手軽さが増したことによって、恋人同士ではいつでも連絡を取り合うことが可能となり、常にSNS上でも繋がっていられるようになった。これによって、恋人と自分の思いのままに付き合うことも容易くなったことで、恋人のことを好きであるがゆえに相手の行動を制限してしまう束縛行動が、近年恋愛における1つの議論の的となっている。現代の主なコミュニケーション手段であるLINEの、既読無視や未読無視などのワードがその最たる例であろう。LINEで数分以内の返信や毎晩の電話などを強要し、相手の気持ちを考えず自由を奪ってしまうような事例も多々存在する。

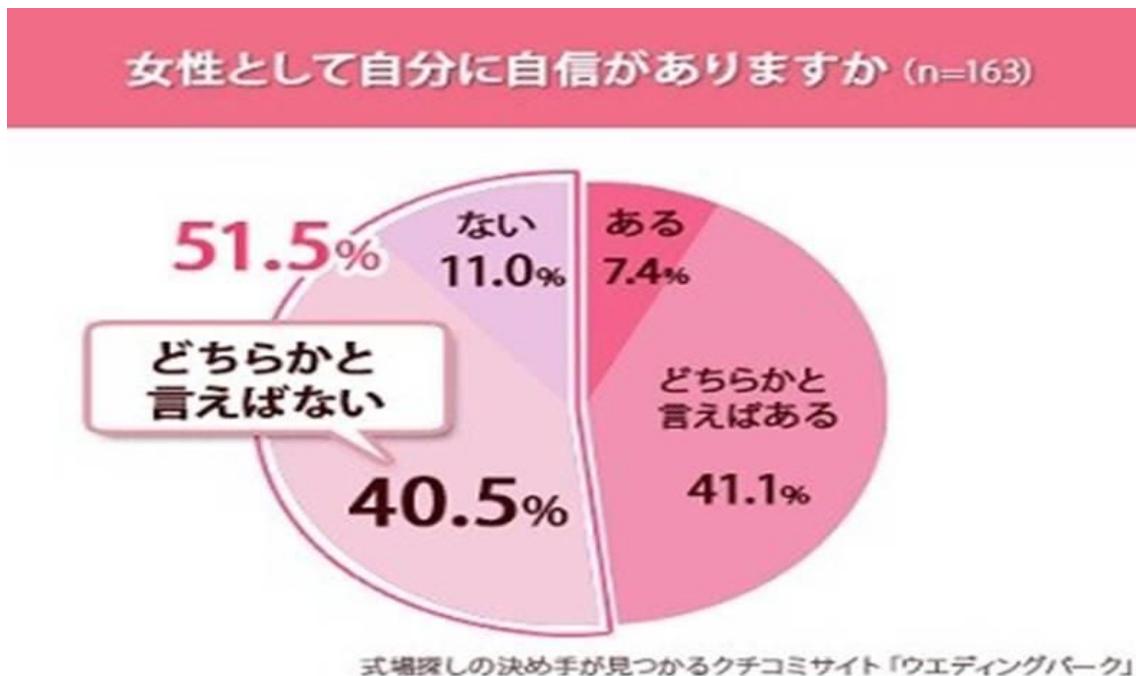
このような、私たち大学生にとって身近に存在するテーマである、束縛行動について、どのような心理状態や価値観からそういった行動に繋がるのかについて疑問を持ち、研究を行った。本研究が、相手の自由や尊厳を奪うことにもつながる束縛行動の減少に貢献し、私たち自身もそういった恋愛における心理を深堀したいと考えた。

1-3 束縛行動を生じさせると考えられる心理

単に恋愛における束縛行動といってもその内容は多岐にわたる。例えば、電話やメールを毎日するよう要求される、メールや戦術のLINEなどのSNSアプリケーションにはすぐ返信するよう言われる、メイクやファッション、ヘアスタイルまで事細かに注文をつけるなど様々な束縛の体系が存在する。これらはどれも相手の異性関係だけでなく、相手の事情などお構いなしに、とにかく自分の思い通りにしようとする、という考え方や行動まで束縛するものである。これらはどれも、束縛される側にとってもいい気分にはなりえないもの。しかし、実際には束縛行動はもはや社会現象の一つとして、特に若者の間で常識化されている。愛する恋人にとってマイナスな行動であるはずの束縛行動を行ってしまうのには何か深い理由や心理状態が存在するはずである。これらを紐解くことである共通の世界観を発見することができた。

・自分自身に自信がない

表面上の性格とは関係なく、人は誰かを本気で好きになったのであれば、相手が自分の下を離れて行ってしまうのではないかと不安になってしまう。これは、自分の恋人の長所や好きになれるところばかりを認識してしまい、恋人を過大評価してしまうことによって、相対的に自分を低く見積もってしまうことが大きな要因である。自分に対して自信がなく、相手の恋人と釣り合わないと考えてしまうからこそ、恋人が自分の手から離れて行ってしまうことを恐れて束縛行動を行ってしまう傾向にあるのだ。（図4 マイナビニュース調べ）



【図4】自分に対して自信があるか（女性編）
出典：マイナビニュース 2014年11月8日記事

・浮気に対しての願望がある

意外に思われるかもしれないが、自分自身に浮気願望がある人にも束縛行動を行う要因が存在すると考えられる。人は、自身が考えていることは相手も同じように考えているだろう、という風に自分の考えを相手にも投影する性質を持っている。自分の幼いころの家族の中の常識が、大きくなるにつれて世の中の常識ではないと気付いたりすることがある。これがその1例である。つまり、浮気の願望がある人は、相手の恋人も同じように考えているだろうと思い込んでしまい、相手の浮気から生じる不安感から束縛行動を行ってしまうことがあるのだ。

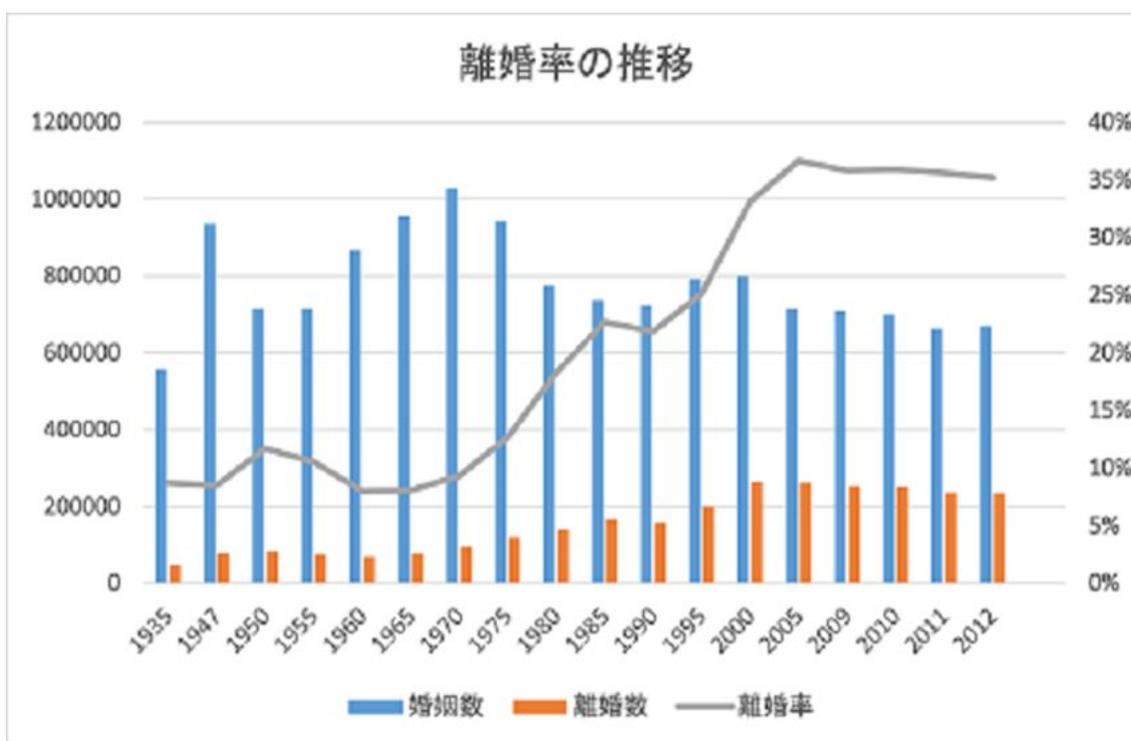
これらの心理には1つの共通点が存在する。それはどちらの心理も、相手の状態や考えを気にするあまり、それが不安に繋がってしまっているということである。相手と自分を比べることなく、自分に対して自信を持ち、多様な心理や世界観を認めるからこそ相手への不安感が無くなり、信頼へと繋がるのである。このように、本章では近年の大学生における恋愛事情から始まり、恋愛における束縛行動について深掘することで、その原因となる時代背景や心理について考えた。事項では束縛行動に影響を与えうる世界観についてさらに詳しく見ていきたいと思う。

1-4 束縛行動による今後の問題

束縛行動はそもそも相手の心や自由な活動を制限する、よくない行動というイメージが蔓延している。しかし、上記のように技術の発展や相手のことを気にしすぎてしまう心理によって、現実に束縛行動を行う者も確かに存在する。こういった問題は単に恋人間の問題にとどまらなないと考える。束縛行動のような社会の現代化に伴う問題は、今後の世の中にも弊害となって現れるのではないか。本稿では束縛行動による将来起こりうる問題について予測したいと思う。このような問題の予測について考えることによって、その解決策や原因の究明に繋がることを願っている。

・離婚率の増加

夫婦間の離婚率は年々上昇し、2012年には約3組に1組が離婚を経験するという結果となった。（図5 離婚率の推移）件数では20万人を超え続け、離婚問題はもはやどの夫婦にも懸念しなければならない問題にまで、広がりを見せている。



【図5】離婚率の推移

出典：厚生労働省 人口動態統計月報年計（概数）の概況

この現代の離婚率の増加は何が原因で起きている問題なのだろうか。直接的な原因としては、上記のグラフでも記されているように、そもそもの婚姻数が減少していることが挙げられる。そのような離婚率の増加、婚姻率の減少の主な原因として相手の

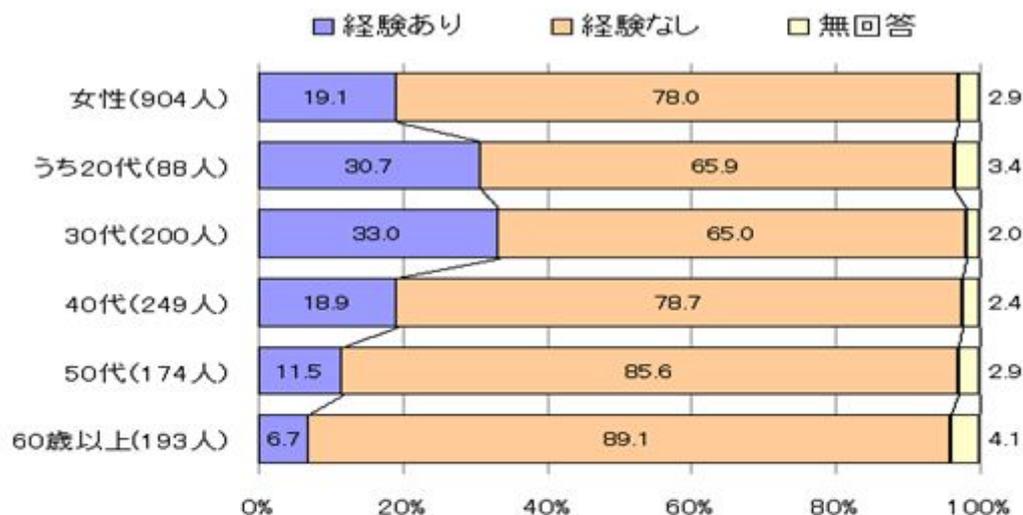
束縛行動もその大きな原因としてあるだろう。相手のことを大事に思いすぎるあまり、相手を信じられなくなったことによって生じた束縛行動が、相手の権利や自由を侵害し、離婚を選ぶ夫婦も少なくないのである。相手の恋人をととても大切に思っているのに、相手を傷つけてしまう束縛行動を行ってしまうというのは悲しい事実である。お互いを好きな自分と相手にとって何をするのがベストなのかを考え、行動し幸せになることが、どんな恋人にとっても至上命題なのである。

・デートDV

近年若者の間で広がりを見せつつある「デートDV」という言葉。これは交際中の若いカップルの間に起きる暴力のことである。殴る蹴るといった身体的な暴力に加え、傷つくような言葉を相手に対して投げかける精神的な暴力、お金をたかるような経済的な暴力、キスやハグを強要する性的な暴力などがこれに含まれる。つまり、「デートDV」とは、配偶者・恋人からの暴力であり、ドメスティック・バイオレンスの略称である。この「デートDV」が最近、10代、20代の若いカップルの間でも起こり問題になっている（図6、7 恋人からのDV被害経験）。これらの暴力は将来、深刻な夫婦間のDVにつながる可能性も高く、防止策が急がれているような現状である。

これは束縛行動から生じる問題というよりも、束縛行動の1種であり、それがさらに深刻になったものである。こういった暴力的な行動が、愛する恋人の間で起きてしまうことは何とも悲しい事実である。人本来の自由や尊厳を取り戻すためにも、DVのような問題を解決することは必要不可欠なことなのである。

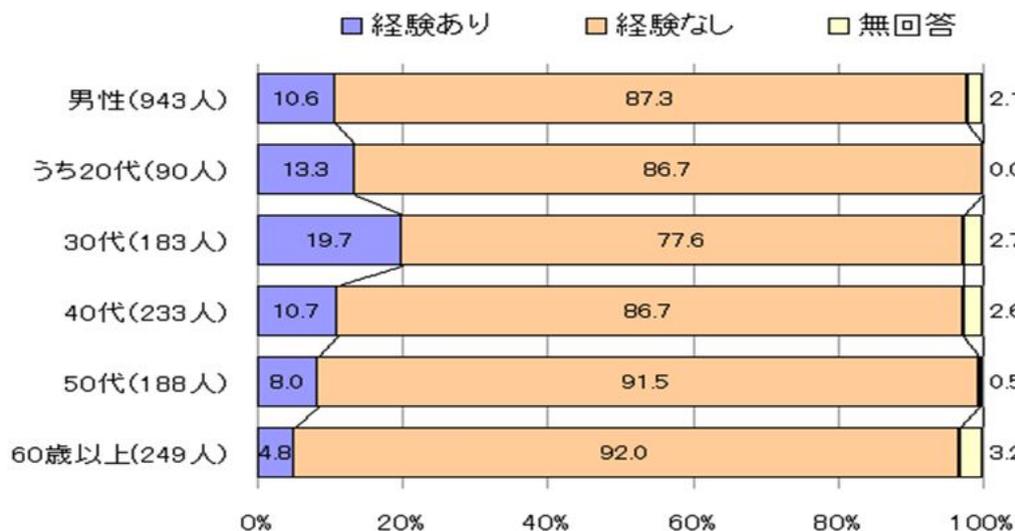
恋人からのDV被害経験(女性)



(注) これまでに交際相手がいいた者が、その交際相手から受けたDV被害に関する集計結果である。具体的な問は、A身体的暴行(例えば、なぐったり、けったり、物を投げつけたり、突き飛ばしたりするなどの身体に対する暴行)、B心理的攻撃(例えば、人格を否定するような暴言、交友関係や行き先、電話・メールなどを細かく監視したり、長期間無視するなどの精神的な嫌がらせ、あるいは、自分もしくは自分の家族に危害が加えられるのではないかと恐怖を感じるような脅迫)、C経済的圧迫(例えば、バイト代や貯金を勝手に使われる、デート代を無理やり払わされるなど)、D性的強要(例えば、いやがっているのに性的な行為を強要される、見たくないポルノ映像等を見せられる、避妊に協力しないなど)のいずれかがあったか。

(資料)内閣府男女共同参画局「男女間における暴力に関する調査」(2014年調査)

恋人からのDV被害経験(男性)



(注)(資料)同上

【図6、7】恋人からのDV被害経験

出典：上記

このように束縛行動によって、恋人や夫婦といった最も身近な関係に大きな問題を生じさせてしまう可能性が存在する。また、これらの問題はどちらも、いま日本が抱えている最も大きな問題である少子化の大きな要因の一つとなってしまうのではないかと考えられる。束縛行動という、一見すると最近の社会問題の1つに過ぎない問題が、今後の日本の発展を妨げる弊害の1つになってしまう可能性を秘めているのだ。本稿がこのような将来起こりうる問題を重視し、束縛行動についてさらなる関心と危機感を持ち、今後起こりうるであろう問題に対する解決策への手助けとなることを願っている。

2. 用語定義

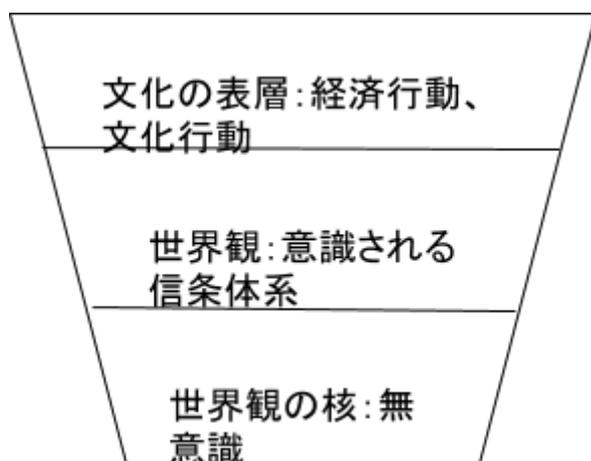
本論文は、大学生の恋愛行動における束縛行動と、人の目を気にする八方美人主義との関わりについて研究したものである。本章では今後の論文の中に使用されている言葉について、特に頻出し本稿にとって重要な意味を持つ単語における、その明確な意義を示すことによって、この先の論文の内容をより正確にわかりやすく読み解くことを願って記した。

2-1 世界観について

まず、世界観とは文化人類学などの、いくつかの学問で使われてきた概念であり、その定義も複数存在する。Hiebert (2008) は『Transforming Worldviews: An Anthropological Understanding of How People Change』において、世界観とは1つの人々の集団が生活を秩序づけるために用いている、現実の性質に関する認識、感情、判断に関する、基礎的な仮定と枠組みであると定義した。世界観とは個人がこの世界をどのように見ているかを表す概念であり、Hiebertの定義に従うならば、特に集団に対する意識であると捉えることができる。例えば、宗教は人の世界観に大きな影響を与えるが、同じ宗教を信仰する者同士が全く異なる世界観を持っていることも多いし、逆に違う宗教を信仰する者が多くの部分で同じような世界観を持っていること

も多い。人間の経験には、感覚機能や脳によって一定の形式が与えられているので、すべての真実を認識できるわけではなく、すべての人が何らかの世界観という名の「眼鏡」をかけて世界を見ている、というのが世界観の考え方である。世界観という眼鏡を通して見える景色は人によって微妙に異なるものの、あるグループの人々に世界観の共通性が見られるならば、その共通性を持つ世界観から文化を定義することができるのだ。

また、類似の概念として文化やアイデンティティがあるが、世界観とはそれらの背後にある信条体系すべてを世界観と定義している。（図4 大垣昌夫・田中沙織（2014）『行動経済学 —伝統的経済学との結合による新しい経済学を目指して』）



【図4】 文化と世界観の定義

出典：大垣昌夫・田中沙織（2014）『行動経済学 —伝統的経済学との結合による新しい経済学を目指して』

2-2 八方美人主義について

世界観の定義については上記の通りである。私たちの論文における言う八方美人主義とは単純に言ってしまえば、前述の世界観の中における、他人からの目を気にし、常にその理想像を追い求める世界観である。以降使われる八方美人主義も同様の意味として読み進めていただきたい。

3. 研究仮説

上記の序文より、私たちは大学生である私たちにとって最も関心があり身近な問題である恋愛行動、特に束縛行動に注目し、それらの行動はどのような世界観がその違いに影響をもたらしているのかということに疑問を持った。

まず、束縛行動を行う際に付きまとう問題は周りからの目や評価である。友達や世の中の大人たちといった世間の目を気にするあまり、相手を支配しようとするような、世間体の悪い行動は控えるという考え方も、そういった世間の目から、仲の良い理想のカップルだと評価されたいがためにより束縛行動を行うという考え方もできる。しかし、私たちはまずそのような束縛行動を生む要因となる世界観として八方美人主義を挙げ、「自分が他人にどう見られているか気になる人ほど、束縛・サプライズ行動を行う」と考え、研究仮説を立てた。まず研究方法について説明したのち、アンケート調査の回帰分析結果、そこからの考察について述べたいと思う。

4 実証分析

本章では、実際に大学生を対象にアンケートを行い実証分析を行った結果をもとに研究仮説の妥当性について検討していく。

4-1 研究指針

八方美人主義は先述した通り、他人からの視点で考えてこう思われたいという自分の中での客観的な自分の理想像に基づいて行動するのをよしとする世界観である。つまり、他人からの視点を重視しつつ、それに基づいて自分の中での理想像を定め、その理想像に向かって己を強く持って行動すべきだという考え方であり、この八方美人主義と比較対象として私たちは理想主義（現実の姿よりも理想像を重視する世界観）、自律主義（自分で自分を律し他人にあれこれ干渉するのを避ける世界観）の2つの世界観を用い、それぞれの世界観に対して一つの質問、合計3つの質問を設置して各世界観に対する度合いを測った。

次に、経済行動として本研究で焦点を当てた「束縛行動」については片岡祥・園田直子（2014）の「恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響」中の恋人支配行動の因子を参考に9つの指標を用いた。恋人との関係に対する過度な不安や過度な愛情に起因する恋人の行動を制限するような行動は、恋人にとっては“束縛行動”と受け取られ、喧嘩や別れの原因となってしまう。本研究では、一般的に恋人の行動を制限することになっていると考えられる行動を取り上げ、特に昨今のス

スマートフォンの爆発的普及により連絡が常にとることができるようになった現代特有の問題として挙げられるスマートフォンにまつわる束縛行動にも注目し、時代にあった現代に生きる大学生の生の実情を調査するべく、質問を厳選した。恋人を自分の所有物、または自分の一部と錯覚し、恋人のすべてを知ろうとしたり、恋人の行動を自分の思い通りにしようとしたりする束縛行動の大元には恋人への支配欲が関係していると考えられる。付き合いだてのカップルでは双方の一時的な気持ちの高ぶりやお互いの美化された姿により特に気にならなかった、もしくは自己への愛情を感じられる嬉しい行為であっても、時間が経つとそうした感情は薄れ、面倒くさい、制限されているといった負の感情が浮き彫りになってきてしまうのである。こうしたことを踏まえ、束縛行動の指標として、明らかに自分の行動を支配されている、制限されていると分かるような行動と、一見自分のことを思っていてくれるように感じられる行為だが程度が行き過ぎると重い、面倒くさい、といったただ自分の存在をつなぎとめているだけの束縛行動として受け止められかねない行動の両方を設けた。具体的には、恋人のすべてを把握しようとする把握度について質的変数と量的変数の両方を用意し、束縛行動の代表格である異性関係の制限の質問、スマートフォンに起因する連絡頻度やプライバシーへの介入行為、また関係の維持には大切な喧嘩に直面した時の双方の合意による仲直りを怠り自分の意見を押し通そうとする短気の度合いを図る質問や、恋人にとって自分を第一に考えさせようとする支配行動についての質問も用意した。それに加え、行き過ぎた愛情や関係に対する不安、恋人への支配欲求などにつながっていないかを知るため、時間やお金をどれだけ恋人に割くかといった量的質問も加えた。

4-2 研究方法

本節では、具体的なアンケートの実施方法とそれの分析手順について明示することとする。

4-2-1 アンケート収集方法

上記で述べたような3つの世界観、「八方美人主義」「理想主義」「自律主義」の世界観と「束縛行動」の経済行動についての質問をGoogle form上で作成し、(実際の質問項目については付録のアンケート表を参照。)現役大学生(2017年8月時点)を対象にLINEで友人を中心に拡散したところ、男女合わせて199名から回答を得た。そのうち、有効回答数は164であった。

4-2-2 質問項目の指標設定

本稿では、具体的に一つ一つの質問について何の指標に用いたのかを改めて明示しておく。(前述のようにQ1~Q13については付録を参照)

Q1~Q3は世界観の質問、Q4~Q13は経済行動についての質問となっている。まず、世界観の質問は、それぞれの世界観の思想に対してどの程度自分はそう思うのかを6段階で評価してもらい、すべて質的変数として扱った。Q1は理想主義の質問、Q2は八方美人主義の質問、Q3は自律主義の質問となっている。経済行動の質問についてはQ4~Q9はそれぞれの具体的な束縛行動についてどの程度自分が当てはまるのかをまた6段階で評価してもらい、質的変数として扱った。Q10~Q13は回答にばらつきを持たせてより精密な研究を実施するために具体的な数値を回答してもらう量的変数と

した。Q4とQ10は恋人をどれほど把握しようとするのかについての把握度、Q5は恋人の異性との交友関係をどれほど制限するかの制限度、Q6は恋人との連絡頻度、Q7は喧嘩の際の態度についての短気度、Q8は恋人のスマートフォン内のプライバシーに介入するかの交友監視度、Q9は恋人にとっての自分の立ち位置を一番にして支配しようとする強制度、Q11は恋人との共有時間についての希望を問う期待共有時間、そしてQ12,Q13で恋人のためにどれほど自分のお金を割けるかという献金度について問う質問を設置した。Q11では予定のない1か月という前提を設けることで大学生の多種多様な生活スタイル関係なく、恋人と純粋にどれだけ一緒にいたいかという期待共有時間の平等性を考慮し、Q12で収入、Q13でそのうち恋人に使う額を聞き、Q12の額に占めるQ13の額を算出することで収入に関係なく、どれほど自分のお金を恋人のために使うかという期待献金額についての平等性を考慮した。以下、これらの用語を用いて研究結果を記していく。

4-2-3 分析方法

Google Form 上で得られた164件の有効回答を用いて、Excelの分析ツールにより回帰分析を行った。分析は「単回帰分析」と「重回帰分析」の2種類を実施した。第一に、単回帰分析では、世界観についての3因子を説明変数、経済行動についての9つの因子を被説明変数としてそれぞれ相関関係が見られるか計27個の単回帰分析を行った。第二に、世界観についての3因子を「理想主義×八方美人主義」、「理想主義×自律主義」、「八方美人主義×自律主義」というように2つずつ掛け合わせた変数を用いて、9つの経済行動の被説明変数と照らし合わせ、さらに「理想主義×八方美人主義×自律主義」というように3つを掛け合わせた変数を用いて、単回帰分析において有意な結果が得られた「把握度」「連絡頻度」「期待把握度」「献金度」の4つの経済行動の非説明変数と照らし合わせ、計31個の重回帰分析を行った。

4-3 分析結果

本節では、Excelツールを用いて得られた回帰分析の結果データを示す。

以下の表4-aに説明変数と被説明変数すべての記述統計量を記す。

《表4-a 記述統計量》

	平均	標準偏差	最大値	最小値
理想主義	3.669	1.370	6	1
八方美人主義	4.449	1.258	6	1
自律主義	4.867	1.048	6	2

把握度	2.669	1.273	6	1
制限度	2.374	1.152	5	1
連絡頻度	3.687	1.476	6	1
短気度	1.847	1.165	6	1
交友監視度	1.166	1.169	6	1
強制度	2.086	1.317	6	1
期待把握度数	71.50	17.88	151	15
期待共有時間	9.104	5.693	30	0
献金度	0.336	0.207	1	0

表の値から、すべての変数である程度のばらつきのある回答が得られた事が読み取れる。

続いて、以下に単回帰分析結果を記す。

《表4-b1 「把握度」を被説明変数とした単回帰分析》

説明変数	係数	有意水準 (p値)
理想主義	0.046	0.529288
八方美人主義	0.29***	0.000241
自律主義	-0.035	0.714403

(***は有意水準1%で有意であることを表している)

《表4-b2 「制限度」を被説明変数とした単回帰分析》

説明変数	係数	有意水準 (p値)
理想主義	0.020	0.759747
八方美人主義	0.11	0.115811
自律主義	-0.098	0.255069

《表4-b3 「連絡頻度」を被説明変数とした単回帰分析》

説明変数	係数	有意水準 (p値)
理想主義	0.0036	0.96615
八方美人主義	0.27***	0.003381
自律主義	-0.19*	0.087891

(*は有意水準10%、***は1%で有意であることを表している)

《表4-b4 「短気度」を被説明変数とした単回帰分析》

説明変数	係数	有意水準 (p値)
理想主義	0.14**	0.036245
八方美人主義	-0.048	0.514601
自律主義	-0.021	0.807189

(**は有意水準5%で有意であることを表している)

《表4-b5 「交友監視度」を被説明変数とした単回帰分析》

説明変数	係数	有意水準 (p値)
理想主義	0.071	0.289494
八方美人主義	0.11	0.126723
自律主義	-0.14	0.105068

《表4-b6 「強制度」を被説明変数とした単回帰分析》

説明変数	係数	有意水準 (p値)
理想主義	0.077	0.307978
八方美人主義	0.091	0.266756
自律主義	-0.17*	0.081035

(*は有意水準10%で有意であることを表している)

《表4-b7 「期待把握度数」を被説明変数とした単回帰分析》

説明変数	係数	有意水準 (p値)
理想主義	0.69	0.502615
八方美人主義	2.7**	0.013381
自律主義	-0.097	0.942403

(**は有意水準5%で有意であることを表している)

《表4-b8 「期待共有時間」を被説明変数とした単回帰分析》

説明変数	係数	有意水準 (p値)
理想主義	0.33	0.315341
八方美人主義	0.54	0.1257
自律主義	0.054	0.90044

《表4-b9 「献金度」を被説明変数とした単回帰分析》

説明変数	係数	有意水準 (p値)
理想主義	3.4	0.809402
八方美人主義	0.027**	0.035008
自律主義	20	0.272717

(**は有意水準5%で有意であることを表している)

以上が、9つのすべての被説明変数に対して3つの説明変数それぞれで単回帰分析を行った計27個の単回帰分析結果である。計27個の結果のうち有意水準10%以下の有意な結果が得られたのは7つであった。

便宜上、以下表4-b 10に上記の表に記したデータのうち有意な結果が得られた7つのデータのみ抜粋して記す。

《表4-b10 有意な単回帰分析結果》

被説明変数 y (経済行動)	説明変数 x (世界観)	係数	有意水準 (p 値)
-------------------	-----------------	----	---------------

把握度	八方美人主義	0.29***	0.000241
連絡頻度	八方美人主義	0.27***	0.003381
連絡頻度	自律主義	-0.19*	0.087891
短気度	理想主義	0.14**	0.036245
強制度	自律主義	-0.17*	0.081035
期待把握度数	八方美人主義	2.7**	0.013381
献金度	八方美人主義	0.027**	0.035008

(*は有意水準10%、**は5%、***は1%で有意であることを表している)

以上のように、世界観に関する3つの指標すべてにおいて、少なくとも1つのデータで有意な結果が得られたことから、理想主義、八方美人主義、自律主義はすべて何かしらの束縛行動に関係があることがわかった。しかし、合計27個の結果のうち7つのみで有意な結果が得られたという事は、同時に研究仮説や指標設定が不完全であったことを示している。有意な結果が得られた単回帰分析結果をまとめた表4-b10から読み取れる顕著な特徴は具体的に2点ある。1つは、説明変数の欄に着目すると、4つが八方美人主義、2つが自律主義、残る1つが理想主義というように有意な結果が得られたデータの世界観の指標に偏りが生じていること。2つ目は、係数の欄に着目すると分かるように、説明変数が理想主義と八方美人主義のデータでは係数の符号は“正”であるのに対し、説明変数が自律主義のデータでは係数の符号が逆の“負”であるということである。これら2点についてここで詳述していくこととする。

まず1つ目について。八方美人主義を説明変数とした単回帰分析では2つが有意水準5%、2つが有意水準1%で有意な非常に精度の高い結果が得られた。なおこれらは「他人から見た自分の理想の姿を重視する人ほど恋人に対して束縛行動を行う」とした私たちの研究仮説と整合的な結果である。続いて自律主義を説明変数とした単回帰分析で2つのデータにおいて有意水準10%で有意な結果が、最後に理想主義を説明変数とした単回帰分析では1つのみのデータにおいて有意水準5%で有意な結果が得られた。これらの結果から、有意な結果が出たデータの数の観点からも有意水準の高さの観点からも、我々が設定した3つの因子のうち八方美人主義が圧倒的に束縛行動に関係していることがわかる。我々は八方美人主義の世界観の他に、客観的な自己の理想像を重視すること、その理想像に向かって他人を巻き込むことなく自己を律して励むことを重視すること、の2つの世界観も関係していると考えたが、八方美人主義の世界観を持つ人は実際は、何よりも「他人からよく思われたい」という他人からの視点を最も重要視していると推測される。特に束縛行動の「把握度」に関しての質的変数、量的変数の双方の因子で有意な結果が得られたことは注目すべき点である。これは、他人から

の「お互いをよく理解している関係の良いカップル」としての評価を重視するため、恋人の多くを知りたい、把握していたいという願望、そしてその行動につながっているのではないかと推測される。また、この結果は次のようなことも示唆していると考えられる。他人からの「関係の良いカップル」という評価を重視している人ほど、恋人の多くを把握することを重視している、逆に言うつまり、他人から「関係の良いカップル」と見られるには、恋人の多くを把握しているということはかなり重要な要素と考えている人が多いということも推測される。この結果は当然のことを示しているようにも見える。この点については、恋愛関係の安定性とカップルの相互作用の関係性について記された清水・大坊(2003)の論文「恋愛関係における愛情と関係評価に及ぼす相互作用パターンの影響」を参照したい。彼らはこの論文において、「強く頻繁に親しさを示す人は関係を認知的な側面において高く評価している」ことを証明している。一部抜粋して掲載する。

関係評価について、正準相関分析の結果は、「強く、頻繁に親しさを伝えること」は「認知的な評価」と深い関係があることが示された。すなわち、「カップルとして上手くいっている」、「安定している」という判断、あるいは「将来も一緒にいるだろう」といった予測が「より親しさが伝わるような行動を多く行う」ことによってなされているということであり、妥当な結果であると思われる。

このように、カップルの間で親しさが伝わるような行動は関係の良いカップルとしての認知に深く関わりがあることが示されている。カップル間の親密性つまりカップル間での深い相互理解が「うまくいっているカップル」としての評価を得るのに重要な要素となっていることは妥当な結果だと言える。

次に、2つ目の自律主義を説明変数とした単回帰分析結果について述べる。連絡頻度と強制度を被説明変数とした2つのデータにおいて有意な結果を示したものの、いずれも私たちの提示した研究仮説とは逆の“負”の相関を示した。つまり「自らを律し、他人に干渉するのを避ける人ほど恋人に対して束縛行動をしない」という事を表している。経済行動の因子である連絡頻度と強制度に対して、他人に干渉すべきではなく自己を律することが可能な人、つまり自分の欲求を自らコントロールすることができこの場合の他人である恋人に対してあまり干渉すべきではないと考えている人は、恋人に連絡を強要したり、恋人にとっての自分の存在価値を押し付けたりするような束縛行動はしないと解釈できる。このように“負”の相関が出た結果について、束縛行動の連絡頻度と強制度について着目したい。恋人と常に連絡を取り合うといった連絡頻度と、恋人に自分を第一優先に考えるように強いる強制度についての束縛行動の因子は特に“カップル”としての“束縛”的要素が強い因子だと考えられる。つまり束縛行動としてのマイナスなイメージの多い行動である。自律主義という因子は、他人から独立して強い自制心をもって自己の理想像を実現すべきという意味合いが強く、カップルにおいては、「カップルとしての理想像」よりもむしろ「彼氏もしくは彼女としての理想像」を重視している世界観であると考えられる。したがって、「良い彼氏もしくは彼女」としての評価を恋人から得るために、恋人にとってマイナスとなるような行動はとらないと考えられるのではないかと。このように考えると、説明変数を自律主義とした2つの“負”の相関が得られた有意な結果は妥当性があると言える。これらの詳細については考察で後述することとする。

最後に、理想主義についても少し触れておく。理想主義を説明変数とした単回帰分析では、短気度を被説明変数としたただ1つの単回帰分析のみで研究仮説と整合的な有意な結果が得られた。これは、理想主義の強い人は現実での恋人との関係よりも自分の中での理想の関係を大事にしているため、恋人との関係の中で少しでも自分の中の理想とは異なることが生じた場合に、その現実を受け入れられず現実問題に対しての解決策を見つけ出そうという努力を怠る傾向にあるという事を説明していると考えられる。これは「カップルとしての理想像」を重視する世界観からは当然の結果といえるだろう。

続いて、重回帰分析結果について記していく。重回帰分析では、単回帰分析で有意な結果が得られた説明変数では同様に有意な結果が得られた。これらは、これからデータ結果を用いて考察していくにあたって必要ではないと考え、のちの付録にまとめて掲載することとする。ただ一つの結果だけ、単回帰分析では有意でなかったデータが得られたのでそのデータを以下の表4-cに記す。

《表4-c 「交友監視度」を被説明変数とした重回帰分析》

	指標	係数	p値
説明変数x1	八方美人主義	0.11	0.136824
説明変数x2	自律主義	-0.14	0.113401

(有意F = 0.08897*、*は10%水準で有意であることを表す)

交友監視度を被説明変数とし、八方美人主義と自律主義を説明変数とした重回帰分析で有意な結果が得られた。八方美人主義の係数は正、自律主義の係数が負の値であることを踏まえると、

「他人からの評価を重視する世界観を強く持ちながら、自己を律して他人に干渉することを避ける世界観は弱い人ほど、恋人のスマートフォンでの交友関係を監視する傾向にある」という事を説明している。これは、他人からの良好な関係のカップルという評価を得るためには、他人つまり恋人にも干渉すべきと考えるため、プライバシーの領域である恋人のスマートフォンでのやり取りまで目を通し、交友関係を把握しようとする傾向にあることを示していると予想できる。

5. 考察

5-1. 「単回帰分析について」

世界観を問う質問3つと、経済行動を問う質問9つについて、それぞれ単回帰分析を行なった結果、有意な結果が得られたのは上記に示した組み合わせである。その

各々についての考察と、有意な結果が得られなかったことに対する私達なりの考察を記す。

5-1-1. まず、「自分は現実に関わらず理想を追い求める方だ」の質問と、「喧嘩をすると恋人にすぐ別れ話を持ち出すことがある」の質問の回答について、有意な結果が得られた。これは、現実に関わらず理想を追い求める人（いわゆる「理想主義」的な人）ほど、恋人との喧嘩の際に別れ話を持ち出すことによって、（恋人がまだ別れたく無いと思っていた時に限るが）相手より上の立場に立って喧嘩を理想的な展開に持って行こうとするのだと考察した。つまり「喧嘩したり、何か歯向かったりしたら別れ話をされる」と思わせ、恋人に対して「精神的支配」をすることによって恋人を束縛しようとするのである。ここで言う「自分」と「他人」は明らかに「自分」と「恋人」であり、恋人を完全なる他人として扱っている。今回世界観を問う質問のうち「自分は現実に関わらず理想を追い求める方だ」の質問との単回帰分析によって有意な結果が得た質問が「喧嘩をすると恋人にすぐ別れ話を持ち出すことがある」という質問だけであり、他の束縛行動に関する質問との単回帰分析では有意な結果が得られなかったのは、やはり現実に関わらず理想を追い求めるような理想主義的な人は、恋人と付き合ったとしても自分は自分、他人（恋人）は他人という考えを持つ傾向があり、今回私たちが立てた研究仮説の一部である「自分と恋人をまとめて自分たちと捉える」という考えに当てはまらなかったからでは無いかと考察する。しかし、現実に関わらず理想を追い求めるような理想主義的な人は、恋人に対しても自分の理想通りの要求を強いて、束縛行動を起こすのでは無いかとも考えられる。これについては「自分の理想を重視する」考えが、「他人に関わらず自分の内面的な理想を重視する」考えと、「他人に対して理想を要求する」考えに分類され、さらに細かく回帰分析する必要があるであろう。

5-1-2. 「自分が他人にどう見られているか気になる」の質問と、「恋人とは常に連絡を取り合う」の質問の回答について、有意な結果が得られた。自分が他人に見られている姿を重視する（八方美人主義）人ほど、恋人と常に連絡を取り合う傾向にあるということだが、これはまさに私たちが立てた研究仮説通りの結果であると考えられる。自分が他人に見られている姿を重視する八方美人主義的な人ほど、自分と恋人をカップルとしてまとめて「自分」と考え、カップルとしての「自分」が他人にどう見られているかを気にするのである。ここでいうカップルとしての「自分」が他人によく見られるとは、いわゆるカップルとして羨ましがられるということであり、カップルとして仲良しに見られるということである。カップルとして仲良しであり、羨ましがられるために、八方美人主義的な人は常に恋人と連絡を取り合い、外部に対して自分たちがカップルとして密につながっていて、仲が良いことをアピールしようとする、と考察する。もちろんここで注意すべき点は、誰しもが「カップルとしての理想

＝恋人と常に連絡を取り合うこと」とは考えていないという点である。しかし今回の調査対象は大学生であり、これを記している私たちの経験からそう解釈する大学生が圧倒的多数であったため、今回は上のように定義した。より説得性を増すために、カップルとしての理想をどう思っているのかというアンケート項目があってもよかったかもしれない。とはいえ、この単回帰分析による有意な結果は我々の立てた研究仮説を証明するに値する結果であると考えられる。

5-1-3. 「自分が他人にどう見られているか気にする」の質問と、「恋人の行動を全て把握しようとする」の質問の回答を単回帰分析したところ、有意な結果が得られた。これは、自分が他人にどう見られているか気にする八方美人主義的な人は、「自分」の一部である恋人が他人からどう見られているかも気にする傾向にあり、その結果として恋人が他人に対してとる態度や行動についても気にし、把握しようとするのでは無いかと考察した。この「恋人の行動を全て把握しようとする」行為は、直接的な束縛行動ではないため、やはり八方美人主義的な人は「束縛」という行為も他人から見て醜いものだと考え、目に見える直接的な束縛行動ではなく、精神的な支配を生む間接的な束縛行動を行うことによって恋人をコントロールしようとするのでは無いか。

5-1-4. 「自分が他人にどう見られているか気にする」の質問と、「恋人のことを何%まで知りたいと思うか」の質問の回答を単回帰分析したところ、有意な結果が得られた。5-1-3で記した内容と一見似てはいるが、これは全く違う性質の質問であると考えている。その理由としては、5-1-3で記した束縛行動に関する質問は、「恋人の行動を全て把握しようとする」であり、知ろうとしているのは恋人の「行動」である。これに対し、今回考察する束縛行動に関する質問は、「恋人のことを何%まで知りたいと思うか」であり、知ろうとしているのは恋人の性格や、好き嫌いなどの恋人に関する情報であり、つまり「恋人そのもの」である。以上の理由から、この2つの束縛行動の質問の考察については別に記すこととする。

さて、今回の「自分が他人にどう見られているか気にする」の質問と「恋人のことを何%まで知りたいと思うか」の質問の回答に有意な結果が得られたことについて、これは八方美人主義的な人は外部へ良いアピールをするために、上記の通り「自分」の一部である恋人の性格や好き嫌いなどを知っておく必要があるからであると考察する。また、「恋人の全てを知っている＝恋人と親密である」という方程式が存在する前提のもとで、恋人の全てを知ろうとするのでは無いかとも考察する。つまり、第三者から恋人について聞かれた時に何でもスラスラと答えられることによって、その親密さをアピールするために恋人のことはできるだけ多く知っておこうとするのである。5-1-3で記したことではあるが、これも直接的な束縛行動では無い。もちろん恋人のことを全て知ろうとする段階で恋人に何らかの直接的束縛があると感じられたならばそれは直接的な

束縛行動となるが、今回のアンケートではそこまでのデータを得ることができなかった。しかし「恋人のことを何でも知っている」という状況自体は恋人に対して直接的な束縛にはなり得ないと考え、これも精神的な支配を生む間接的な束縛行動であると考えられる。

5-1-5. 「自分が他人にどう見られているか気にする」の質問と、「1ヶ月の収入のうち自由に使えるお金はいくらですか？」の質問及び「1ヶ月に恋人のために使うお金はいくらですか？」の質問の回答を単回帰分析したところ、有意な結果が得られた。（ここでは、単回帰分析に用いた数値として「1ヶ月に恋人のために使うお金」/「1ヶ月の収入のうち自由に使えるお金」の商を用いた。）ここでの「1ヶ月に恋人のために使うお金」とは、恋人とご飯を食べたりデートした際に自分が使ったお金も含まれており、「恋人がいなかったら絶対になかったであろう出費」と考える。この結果については、八方美人主義的な人は外部へ自分たちの親密さをアピールするために、デートやプレゼントの回数が比較的多くなり、その結果として恋人のために使うお金も増えるのでは無いかと考察した。しかし、「自分が他人にどう見られているか気になる」の質問と、「特に予定のない1ヶ月があったとしたら、そのうち何日を恋人と過ごしたいですか？」の質問の回答を単回帰分析したところ、有意な結果は得られなかった。これによって、関係しているのはデートや会う日数ではなく1度に使うお金やプレゼント代であると考察した。つまり、八方美人主義的な人は恋人とともに例えば良いレストランや旅行、ディズニーランドなど一度のデートで比較的多額のお金を使う場所に行く傾向があり、それをSNSなどで拡散することで外部にアピールしているのではないかと考察した。また、恋人へのプレゼントに関して、プレゼントという「形あるもの」を交換するという手段が最も外部に示しやすく、結果として多額のプレゼントを与えているのではないかと考察した。大学生が恋人にプレゼントを渡すという経済行動に影響を与える世界観を研究した論文として、鈴木遥加・土師愛美・金正雄・井上寛規（2016）『自尊心と承認欲求が大学生の恋人へのプレゼントの消費行動に与える影響』があるので、そちらも参考にしてほしい。くどいようではあるが、この「1ヶ月のうち恋人のために多くのお金を使う」という行為も恋人の行動を直接的に制限するものではなく、あくまで精神的な支配を生む間接的な束縛行動である。

5-1-6. 「他人に自分の考えを押し付けるのは良くないと思う」の質問と、「恋人とは常に連絡を取り合う」の質問の回答を単回帰分析したところ、負の係数で有意な結果が得られた。つまり、「他人に自分の考えを押し付けるのは良くないと思っている人ほど、恋人とは常に連絡を取り合おうとしない」ということである。これについての考察としては、これまでは自分と恋人をまとめて「自分たち」として、カップルとしての自分たちが他人からどう見られるかを気にするとしていた。しかし、ここでは「他人に自分の考えを押し付けるのは良くないと思う」の質問における「他人」の解釈が「恋人」であると考え、恋人に対して自分の考えを押し付けるのは良くないと思っているような自律主義的な

人は、「束縛行動」をすることによって恋人から悪く思われないようにするために、逆に恋人に対して束縛行動をしないのではないかと考察する。

5-1-7. 「他人に自分の考えを押し付けるのは良くないと思う」の質問と、「恋人に自分を第一優先で考えるように強いたことがある」の質問の回答を単回帰分析したところ、負の係数で有意な結果が得られた。つまり、「他人に自分の考えを押し付けるのは良くないと思っている人ほど、恋人に自分を第一優先で考えるように強いたことがない」ということである。ここでもやはり、他人である恋人に悪く思われないうために恋人に対する直接的束縛をしないのであろうと考察した。やはり、自律的な精神は、束縛行動にある程度関わっていると考え、後に考察する。

5-2. 有意な結果が得られなかったものについて

今回の分析で、有意な結果が得られなかった単回帰分析についてであるが、特に私たちが研究仮説を立てた八方美人主義との分析で有意な結果が得られなかったものについてみていこうと思う。

5-2-1. 理想主義、八方美人主義、自律主義の関係

まず注目したいのは、理想主義、八方美人主義、自律主義の関係である。各価値観は背反的なのか、それとも共存し得るのか。共存したとしたならばどれが強く現れるのか。これらを本研究において明確に解明できなかったため、私達なりの考察とともに仮定しようと思う。理想主義と八方美人主義と自律主義が共存した場合、現実に関わらず理想を重視しながらも、カップルとしての自分たちの理想を重視し、かつ恋人としての自分を重視するということである。こうなると、当人がどの理想を重視する気持ちが強いかによって、その人が理想主義的な人であるのか、八方美人主義的な人であるのか、自律主義的な人であるのかは変わってくるであろう。本研究では、3つの主義を掛け合わせた数値を用いた重回帰分析を行った。その結果を一度ここに掲載する。

《表4-c1 「把握度」を被説明変数とした3変数の重回帰分析》

	指標	係数	p 値 (有意水準)
説明変数x1	理想主義	0.061	0.394096
説明変数x2	八方美人主義	0.29***	0.000222
説明変数x3	自律主義	-0.16	0.866527

(有意 F = 0.002643***、***は有意水準1%で有意であることを表す)

《表4-c2 「連絡頻度」を被説明変数とした3変数の重回帰分析》

	指標	係数	p 値 (有意水準)
説明変数x1	理想主義	0.0022	0.97917
説明変数x2	八方美人主義	0.26***	0.003913
説明変数x3	自律主義	-0.18	0.100784

(有意 F = 0.010233**, **は有意水準5%、***は1%で有意であることを表す)

《表4-c3 「期待把握度」を被説明変数とした3変数の重回帰分析》

	指標	係数	p 値 (有意水準)
説明変数x1	理想主義	0.86	0.403229
説明変数x2	八方美人主義	2.8**	0.012097
説明変数x3	自律主義	0.13	0.921542

(有意 F = 0.079154*, *は有意水準10%、**は5%で有意であることを表す)

《表4-c4 「献金度」を被説明変数とした3変数の重回帰分析》

	指標	係数	p 値 (有意水準)
説明変数x1	理想主義	3.4	0.80913

説明変数x2	八方美人主義	-32**	0.038628
説明変数x3	自律主義	20	0.286963

(有意 F =0.130638、**は有意水準 5 %で有意であることを表す)

まず、表4-c1,4-c2,4-c3を見れば分かるように、八方美人主義の度合いを測る問いに対する回答の数値である説明変数x2のp値が0.05を下回っており、有意水準5%で有意である。これにより、理想主義、八方美人主義、自律主義の中で、八方美人主義が圧倒的に大学生の束縛行動に影響を与えていることがわかり、私たちの立てた研究仮説との整合性を示す結果となったとも言える。

興味深い結果となったのは、表4-c4である。八方美人主義の度合いを測る問いに対する回答の数値である説明変数x2のp値が0.03であり、有意水準5%で有意となったのであるが、係数が-であるため、研究仮説と逆の結果が現れたのである。

つまり、献金度に関しては、(献金度とは、自分の収入で自由に使えるお金のうち、恋人のために費やす費用の割合)理想主義、八方美人主義、自律主義のうち圧倒的に八方美人主義であることが影響を与えていないのである。

これに関しては、献金度は個人によってかなり幅があり、また理想主義でも、八方美人主義でも、自律主義でもないような人の献金額がかなり大きかったのではないかと考える。全体として見ると、八方美人主義的な人の献金度が負の係数で有意となってしまったのではないか。

5-2-2. 「自分が人にどう見られているか気になる」の質問と、「恋人が異性の友達と仲良くする範囲を制限する」の質問について、有意な結果を得ることができなかった。つまり、八方美人主義である人でも、恋人が異性の友達と仲良くすることを直接制限することはないということである。この「恋人が異性の友達と仲良くする範囲を制限する」という行為は本アンケートの中でも特に直接的束縛の色が強く、中々この質問に対してとても当てはまると答える回答者が少なかったことが原因ではないかとまず考えられる

5-3. 「重回帰分析について」

今回、世界観に関する質問3つのうち2つを説明変数x1,x2とし、経済行動に関する質問1つを非説明変数yとして重回帰分析を行なった。また、世界観に関する質問3つを

説明変数 x_1, x_2, x_3 とし、経済行動に関する質問1つを非説明変数 y として重回帰分析を行なった。その結果、単回帰分析では有意な結果が得られなかったが、重回帰分析のみで有意な結果が得られた結果のみを考察することとする。

5-3-1. 「自分が他人にどう見られているか気にする」の質問及び「他人に自分の考えを押し付けるのは良くないと思う」の質問と、「恋人の携帯を勝手に見ることがある」の質問の回答について先述の通り重回帰分析を行なったところ、有意な結果が得られた。つまり、「自分が他人にどう見られているかを気にし、かつ他人に自分の考えを押し付けるのは良くないと思っている人ほど、恋人の携帯を勝手に見ることがある」ということである。これは、恋人の携帯を勝手に見るという行為は、八方美人主義的な外部へ親密さをアピールするための過程としての行為ではあるものの、恋人に秘密で行うものであり、恋人を八方美人主義の矛先としては考えていないのである。結果として、5-1-6及び5-1-7で見られた「他人に自分の考えを押し付けるのは良くないと思っている人ほど束縛行動を行わない」という結果にはならなかったと考察できる。また、この重回帰分析の結果の考察として、「カップルとしての自分たちの親密さをアピールするため、恋人の事を知っておきたいという八方美人主義的な人（矛先は外部）が、さらに自律主義的な考えの下（矛先が恋人）、携帯を勝手に見るといふ恋人に知られないような手段を取って恋人の事を把握しようとする」のではないかと考察した。それぞれの単回帰分析では有意な結果が得られなかったが、この重回帰分析では有意な結果が得られた理由の考察としては十分ではないかと考える。

6. 結論

6-1. 「八方美人主義」と「束縛行動」の関係

今回、当初は単純に「八方美人主義」と「束縛行動」についての相関関係を調べていたが、結果を分析していくうちに「理想主義」と「自律主義」においても同様の結果が得られることがわかった。

自分と恋人をまとめて「自分たち」と捉え、その自分たちが外部（自分と恋人以外の全て）からよく見られようとする事を重視する「八方美人主義」と、自分以外の人間は全て他人であり、特に嫌われたくないと思っている恋人からの目を気にし、自らを律しようとする事を重視する「自律主義」、さらに現実に関わらず理想を追い求め、理想的なカップルであろうとする「理想主義」。これらに対し、束縛行動は、その行動によって恋人が物理的に行動を制限されてしまうような「直接的束縛行動」と、その行動によって物理的には行動を制限されないが、恋人の事を思ったりすることによって精神的に行動が制限されてしまう「間接的束縛行動」に分けられる。これら4つの因子は分析の結果、「八方美人主義」的な人ほど「間接的束縛行動」を行う傾向にあり、また「自律主義」的な人ほど「直接的束縛行動」を行わない傾向にあるということがわかった。しかし、それ以外の関係については有意な結果を得ることができず、さらに八方美人主義、理想主義、自律主義について、その相互の関係をわかりきることはできなかった。八方美人主義的かつ自律主義的かつ理想主義的な人も一定数は存在すると考えており、どれか一方の主義的な人と3つ全ての主義的な要素を持つ人に対象を分けてアンケートを取るべきであったと考える。

6-2. 世界観というものの有用性

本研究で、束縛行動を促進するかもしれないとしてきた「八方美人主義」という世界観が、本当に束縛行動に影響を与えているとするならば、従来の伝統的経済学の研究手法ではこのような研究結果を得ることは中々難しいと考える。上記の回帰分析結果やその考察で分かる通り、本研究では私達が立てた研究仮説通りの有意な結果が得られた。つまり、従来の伝統的経済学の手法のみを使っていた場合では説明のつかないような結果を得ることができたと考える。経済行動の動機として効用以外の要素が含まれていたことは、世界観というものの有用性を十分に示すことになる結果であると考えられる。しかし一方で、やはりこの世界観というものだけでは束縛行動の全てを説明することは難しい。今後は従来の伝統的経済学を基盤としつつも、この世界観という考え方をどこかに用いてうまく融合させていくことが人々の経済行動を解明するための正解となりうるのではないかと考える。

7. 将来の研究課題

本研究では、他人から自分がどう見られているかを気にする「八方美人主義」の世界観と、大学生が恋人に対して行う「束縛行動」との間に有意な結果が得られたことにより、近年の大学生の恋愛に関する束縛行動の一部を理解することができた。また、大学生の束縛行動に影響を与える要素の一部を推定することができたが、より現実近く、実用性高く貢献できるものにするためには、さらなる研究が必要となるであろう。どのような課題点が存在し、これから実用性が高まっていくにつれてどのような可能性が存在するのかを記すこととする。

7-1. 研究、調査対象の細分化及び分類の必要性

本研究にて実施したアンケート調査であるが、対象は大学生と限定しているため、199名の全サンプルは大学生を対象にした。しかし、199という数字は十分な結果ではなく、より膨大な数のサンプル数を集める必要があるように思える。また、集めたサンプルの大学生のほとんどは慶應義塾大学の学生で構成されてしまっていることも課題点と言えよう。大学生にとって所属している大学とは世間が思っている以上に影響力があり、大学毎の「カラー」ともいうべきであろうか、そういったものがとても強く現れるのである。よって、研究対象を「大学生」とするならば、せめて東京で生活をする私立大学生・国立大学生、地方で生活する私立大学生・国立大学生の4パターンのサンプルを集める必要があったように思える。また同様に、本研究における「束縛行動」は、恋愛行動の中でも性差による違いが大きく現れると考える。よって、アンケートに男女どちらかを記載させ、男女別でダミー変数を用いた回帰分析を行い、より分析結果に説得性を持たせることはできたであろう。

これらはアンケート作成・サンプル配布の段階でより深く考察を重ね、どのような条件が必要かを洗い出してから行うべきであったし、そうすることで容易に解決ができる課題であるように感じる。

7-2. 「八方美人主義」と「束縛行動」のさらなる分析の必要性

本研究では、世界観に関する質問として3つ用意し、「自分が他人にどう見られているか気になる」という質問は「八方美人主義」の度合いを図る質問としたが、「自律主義」の度合いをはかる質問として「他人に自分の考えを押し付けるのはよくないと思う」という質問は少し不適切であったように思う。なぜならば、これでは八方美人主義の人も当てはまってしまう質問であるからである。八方美人主義は3因子に分けられるという事が分かった今、より鋭く自律主義の度合いのみを図ることのできる質問を用意し、問うことができるであろう。これも今後改善の余地がある場所である。

また同様に、「束縛行動」について、「直接的束縛行動」の度合いのみを図る質問が少し不適切であったように思う。これも質問の内容を熟考することで解決のできる

課題であろう。

7-3. 今後の実用性について

本研究では、大学生の恋人に対する「束縛行動」についての一部を理解することができ、またその原因についてもある程度理解することができた。さらに研究結果に説得性を持たせることができれば、「束縛行動」という非合理的な行動を未然に防ぐことができ、またこれをある程度無くすることができるのではなからうか。この束縛という行為は、人々の内面的な、心情の部分が大きく関わっており、一概にこうすれば防ぐことができる、と言い切ることはまず不可能ではあるが、本研究を見た大学生や若者が少しでも参考にして、相手がどう思っているのか、なぜ束縛行動をするのかというところに思いを馳せるきっかけとなれば、少しではあるものの束縛行動を防ぐことができるのではないか。行きすぎた束縛行動をなくすことは、両者にとって平穏で、健全な付き合いを可能にする。現在大学生の若者が将来大人になり、今よりも真剣な付き合いや結婚を経て、再び束縛行動が問題になったとしたら、それは今大学生において抱えている問題よりも重大なものとなりうる可能性がある。近年問題となっているデートDVや、リベンジポルノなどの犯罪行為の直接的原因となりうるからである。よって、若いうちから相手を思いやり、束縛行動を防ごうとすることによって、その結果として、デートDVやリベンジポルノなどといった恋愛関係における犯罪行為の減少を促すことができると考える。

8. おわりに

本研究では、「八方美人主義」という世界観が、大学生の束縛行動という経済行動に対して有意な影響を及ぼすということが示された。これによって、ただ単に一つの経済行動の一要因を示すことができたというだけでなく、世界観が経済行動に影響を与えうるということを示すことができたということであり、行動経済学の一考え方に説得性を持たせることができたということでもある。この「大学生の束縛行動」と言うテーマは、個々を合理的な経済主体とする従来の伝統的経済学では解明が難しかったであろうテーマであり、それを今回行動経済学を用いて一部ではあるが解明できたと言うのは、今後の行動経済学の発展に貢献できるのではないだろうか。また考察でも示した通り、特定の経済行動に関して理想主義、八方美人主義、自律主義の3つの世界観に関する数値を用いて重回帰分析を行なったところ、八方美人主義が重要な要素となっていることが分かった。大学生が恋愛において束縛行動をするのは、八方美人主義的な考え方が大きな要因として働いているのではないかと考えられる。また、本研究の中で恋人に費やすお金の大小という項目が登場し、そこで有意な結果が得られたことは非常に興味深いと考える。なぜなら、大学生が恋人に対して使うお金はアンケート結果からもわかるように出費の主要な一部となっており、この動機を解明することは大学生の経済行動を解明することに繋がるかもしれないからである。これによって近年需要の高まっている若者の出費の傾向を探り、企業のマーケティング戦略などに役立つことができるのではないかと考える。

本研究を行うに当たって、経済学について未熟であった著者に対して助言をくださった多くの方々に感謝したいと思う。行動経済学と世界観という考えを我々に示し、指導してくださった大垣昌夫教授、進捗状況に数々の助言をくださった大垣昌夫研究会7期生の方々、また本研究仮説を分析するに当たって、アンケートに協力してくださった大垣昌夫研究会7期生、8期生、慶應義塾大学を始めとする大学生の皆さま、全ての方々に感謝の意を表したい。

引用文献

総務省, 平成22年国勢調査

JMRA(日本マーケティング・リサーチ協会), 2016, 調査(自分に対して自信があるか(女性編))

マイナビニュース, 2014, 記事

厚生労働省, 2013, 人口動態統計月報年計(概数)の概況

Hiebert, 2008, Transforming Worldviews: An Anthropological Understanding of How

People Change

大垣昌夫・田中沙織, 2014, 行動経済学 —伝統的経済学との結合による新しい経済学を目指して

片岡祥・園田直子, 2014, 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響

清水・大坊, 2003, 恋愛関係における愛情と関係評価に及ぼす相互作用パターンの影響

鈴木遥加・土師愛美・金正雄・井上寛規, 2016, 自尊心と承認欲求が大学生の恋人へのプレゼントの消費行動に与える影響

付録1 アンケート表

あなたは恋人がいたことがありますか？

はい

いいえ

以下の質問にははいと答えた人のみ答えてください。

Q1 自分は現実に関わらず理想を追い求める方だ

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

全くそう思わない

とてもそう思う

Q2 自分が人にどう見られているか気になる

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

全くそう思わない

とてもそう思う

Q3 他人に自分の考えを押し付けるのは良くないと思う

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

全くそう思わない

とてもそう思う

(以下の質問には過去が一番最近の経験で教えてください)

Q4 恋人の行動をすべて把握しようとする

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

全く当てはまらない

とてもそう思う

Q5 恋人が異性の友達と仲良くする範囲を制限する

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

全く当てはまらない

とてもそう思う

Q6 恋人とは常に連絡を取り合う

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

全く当てはまらない

とてもそう思う

Q7 喧嘩をすると恋人にすぐ別れ話を持ち出すことがある

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

全く当てはまらない

とてもそう思う

Q8 恋人の携帯を勝手に見ることもある

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

全く当てはまらない

とてもそう思う

Q9 恋人に自分を第一優先で考えるように強いたことがある

① ② ③ ④ ⑤ ⑥

全く当てはまらない

とてもそう思う

Q10 あなたは恋人のことについて何%まで知りたいと思いますか？（0～100までの数字で教えてください）

Q11 特に予定のない1か月があったとしたら、そのうち何日を恋人と過ごそうとしますか？

Q12 1か月の収入のうち自由に使えるお金はいくらですか？

Q13 1か月に恋人のために使うお金はいくらですか？

。

付録2 重回帰分析結果

《表4-d1 「把握度」を被説明変数とした重回帰分析》

	指標	係数	p 値
説明変数x1	理想主義	0.062	0.378358
説明変数x2	八方美人主義	0.29***	0.000205

(有意F=0.000818***、***は有意水準1%で有意であることを表している)

	指標	係数	p 値
説明変数x1	八方美人主義	0.29	0.00026***
説明変数x2	自律主義	-0.025	0.786155

(有意F=0.001163***、***は有意水準1%で有意であることを表している)

《表4-d2 「連絡頻度」を被説明変数とした重回帰分析》

	指標	係数	p 値
説明変数x1	理想主義	0.018	0.824472
説明変数x2	八方美人主義	0.27***	0.003392

(有意F=0.013487**、**は有意水準5%で有意であることを表している)

	指標	係数	p 値
説明変数x1	八方美人主義	0.26	0.003752***
説明変数x2	自律主義	-0.18	0.096733*

(有意F=0.003465***、***は有意水準1%で有意であることを表している)

《表4-d3 「短気度」を被説明変数とした重回帰分析》

	指標	係数	p 値
説明変数x1	理想主義	0.14	0.039943**
説明変数x2	八方美人主義	-0.039	0.593994

(有意F=0.097449*、*は有意水準10%で有意であることを表している)

《表4-d4 「期待把握度数」を被説明変数とした重回帰分析》

	指標	係数	p 値
説明変数x1	理想主義	0.84	0.405037
説明変数x2	八方美人主義	2.8	0.011894**

(有意F=0.033467**、**は有意水準5%で有意であることを表している)

	指標	係数	p 値
説明変数x1	八方美人主義	2.7	0.013713**
説明変数x2	自律主義	-0.00091	0.999453

(有意F=0.047385**、**は有意水準5%で有意であることを表している)

《表4-d5 「交友監視度」を被説明変数とした重回帰分析》

	指標	係数	p 値
説明変数x1	理想主義	0.0092	0.434017
説明変数x2	八方美人主義	0.028	0.031715**

(有意F=0.080264*、*は有意水準10%で有意であることを表している)

	指標	係数	p 値
説明変数x1	八方美人主義	0.11	0.136824

説明変数x2	自律主義	-0.14	0.113401
--------	------	-------	----------

(有意F=0.08897*、*は有意水準10%で有意であることを表している)

《表4-d6 「期待共有時間」を被説明変数とした重回帰分析》

	指標	係数	p 値
説明変数x1	理想主義	4100	0.32736
説明変数x2	自律主義	-13000	0.022544**

(有意F=0.034264**、**は有意水準5%で有意であることを表している)

《表4-c1 「把握度」を被説明変数とした3変数の重回帰分析》

	指標	係数	p 値 (有意水準)
説明変数x1	理想主義	0.061	0.394096
説明変数x2	八方美人主義	0.29***	0.000222
説明変数x3	自律主義	-0.16	0.866527

(有意F=0.002643***、***は有意水準1%で有意であることを表す)

《表4-c2 「連絡頻度」を被説明変数とした3変数の重回帰分析》

	指標	係数	p 値 (有意水準)
説明変数x1	理想主義	0.0022	0.97917
説明変数x2	八方美人主義	0.26	0.003913***
説明変数x3	自律主義	-0.18	0.100784

(有意F=0.010233**、**は有意水準5%、***は1%で有意であることを表す)

《表4-c3 「期待把握度」を被説明変数とした3変数の重回帰分析》

	指標	係数	p 値 (有意水準)
説明変数x1	理想主義	0.86	0.403229

説明変数x2	八方美人主義	2.8**	0.012097
説明変数x3	自律主義	0.13	0.921542

(有意 F = 0.079154*、*は有意水準10%、**は5%で有意であることを表す)

《表4-c4 「献金度」を被説明変数とした3変数の重回帰分析》

	指標	係数	p 値 (有意水準)
説明変数x1	理想主義	3.4	0.80913
説明変数x2	八方美人主義	-32**	0.038628
説明変数x3	自律主義	20	0.286963

(有意 F = 0.130638、**は有意水準5%で有意であることを表す)